

フランス革命期におけるジャコバン＝クラブのネットワーク

竹 中 幸 史

はじめに

今や「社会的結合」はフランス近代史を理解するうえで無視し得ない概念である。この耳慣れない用語を歴史学の分野で本格的に使用したのは、19世紀史を専門とするM・アギュロンであった。彼は、二月革命の際の南仏における共和主義運動を分析した学位論文『南仏苦行信心会とフリーメーソン』において、南仏の人々特有の濃密な人間関係を「ソシアビリテ」と呼ぶことにした。そしてこのソシアビリテを基盤として多種多様なアソシアシオンが形成され人間関係が網目のように組みあわさる様子を描きながら、人々が諸団体の運営と実践のなかで民主主義的行動・平等主義の感覚を習得して政治化し、共和主義に傾倒したと考えたのである。後にこの概念は「人々が取り結ぶ社交関係一般」を指すように修正されて歴史学全体に導入されることになり、日常的な行動に潜む集合心性を探るキー概念として用いられるようになった。今日では国民国家を所与の前提にした歴史観を修正する視点としても注目されている。

アギュロンはソシアビリテを「形のあるもの」「形のないもの」に分けて論じたが、本報告で取り上げるアソシアシオンは前者にあたる。そしてここではフランス革命期におけるアソシアシオンのネットワークについて扱うが、その特徴を浮き彫りにするためにも、まず革命以前のアソシアシオンについて概観しておこう。革命以前には、王国の統治を担った官僚団体から都市の労働世界を規定したギルドにいたるまでの種々の職能団体、行政、経済、慈善活動や葬儀において重要な役割を担った信心会のような信仰団体、アカデミーのような学術団体、またサロンやフリーメーソンといった社交サークルなどが并存していた。近年はこうしたアソシアシオンと革命の関係を問うさいに、18世紀における公衆の存在が重視されている。すなわち世紀中葉以降のジャンセニスト論争、財政改革・穀物取引をめぐる論争のなかで、議論する公衆が生み出す「世論」が権力の正当性を保証するのだと考えられるようになり、このことが「最終審判者としての国王」という神話さえも相対化して、権力のありかを変えてゆく。そして「世論」を生み出すこの議論の場こそフリーメーソンのロッジや文芸協会といった第三身分の社交サークルであったというのである。この考え方に立つなら、アソシ

アシオンにおける議論こそが革命を「考えうるもの」として市民に意識させたことになる。

そして革命前夜に解禁されたばかりの政治結社やパンフレット、そして陳情書作成を足がかりに急速に覚醒した市民たちは、89年以降、政治議論を精力的に行なってゆく。特に立憲議会議員たちが設立した「憲法友の会」通称ジャコバン＝クラブは、議会に提出される議案についてあらかじめ論ずる準議会の性格を有す一方、やや高額の年会費24リーヴルを支払っても政治参加を求めるブルジョワジーが集い、格好の政治教育の場となっていた。これと同じく地方においても、ブルジョワジーの間で政治結社（クラブ、民衆協会）創設の気運は高まっていた。早くも89年末までにボルドーやマルセイユなどの大都市にジャコバンの地方支部が設立され、徐々に中小都市や農村にもその動きは広がってゆく。この状況に対して、パリのジャコバン＝クラブは本部として地方クラブと「提携」関係を結び、情報交換やメンバーの往来などを交わして、クラブの公式連絡網＝ネットワークを形成していった。これがパリ－地方、地方－地方で複雑に編まれることによって、ジャコバンの政治行動に一定程度の統一性が生まれたのである。以下では、全国に叢生し文字通り草の根の次元から革命を支えた地方クラブに注目して、その活動とネットワークについて整理した上で、歴史的意義について考えたい。

1 地方ジャコバン＝クラブのメンバーと活動

この分野において先駆的業績を発表したのは、アメリカの研究者ブリントンである。彼は社会学的手法を用いて地方ジャコバンを総合的に分析し、その全体像を初めて描き出した。これにより、地方クラブのメンバーが主に中流以上の人々であることや、クラブの具体的な政治活動、メンバーの政治信条などが明らかにされたのである。70年余も前に出された研究であるが、そのデータは今なお有効である。まず彼は、法律家、聖職者、教師、芸術家、自由業その他の実業家、店主、官吏といった職業をミドルクラス、また兵士、職人、大工、石工などを労働者階級として分類した。この分類に基づいて12の都市のクラブのメンバーについて、1789年から92年まで中産階級は66%、93年から95年までは57%として、クラブは本質的に中産階級からなると結論づけたのである。この古典的研究に対し1980年代にケネディが、会員名簿の残されているクラブについて再検討を行なった。彼によれば、1791年秋までのメンバー構成は、大ブルジョワジー16%、店主・親方14%、自由業13%、金利生活者4%、聖職者7%、兵士4%とし、賃金労働者・店員・官吏は10%とする（ブルジョワは計71%）。また91年秋から93年5月にかけては、卸売商・金利生活者11.1%、店主・小売商・親方

14.7%、自由業9.9%、聖職者4%、兵士4%、賃金労働者・官吏14.4%としている(同58%)。93年から95年にかけては、共和3年の会員名簿から推定しているが、職人・農民層の増大、ブルジョワの減少を指摘している。すなわち彼の結論もブリントンのそれと大差ないのであり、ジャコバンが中流ブルジョワであることはほぼ確実である。

次いで地方クラブの活動について整理することにしよう。地方においても、クラブの活動の中心が議論にあることに変わりはない。議論の内容は、国政レベルの政治・宗教・経済から、地方議会への不満、果ては瑣末なローカル・トピック(例えば広場の噴水の修理は誰が負担すべきかなどといったもの)まで多岐にわたっていた。また92年以降は、一般席を開放しているクラブが多く、希望者は議論を傍聴する事ができた。先述の通り、こうした議論の結果は、パリの議会や地方自治体へ建白書・請願書として発送されるだけでなく、パリのジャコバン＝クラブや地方のクラブにも送られたため、全国のクラブはある程度情報を共有できたのである。

しかし地方クラブは、パリの本部と異なり、議論以外にも種々の活動を展開した。以下に、そのいくつかを紹介しよう。まずほぼ全てのクラブが行なっていたとみられる活動に新聞講読がある。これはクラブのメンバーら識字能力の備わった者たちが国内外の情報を入手することを助けただけでなく、時には演壇から読み上げられたため、市民の政治的啓蒙にも寄与することになった。またクラブは92年以降の革命戦争の遂行に多大な力を発揮した。革命戦争はその規模ゆえに深刻な兵員・物資不足を引き起こしたのだが、多くのクラブは一般市民に義勇兵参加を呼びかけて兵士召集に尽力している。また女性市民に対しては、古着や火薬、鉄製品の供出や金銭の寄付をしばしば求めている。ルーアンのクラブの議事録などを仔細に検討すると、女性や時には子供たちまでもが、なけなしの貯えをクラブに寄付し、議長の抱擁を受ける姿が散見されるのである。

こうしたクラブの活動の中でも革命の深化に最も大きく与ったのは選挙活動であろう。クラブは、中央・地方政治にかんする議論を行なう私的な場として誕生した。しかしそうした議論が、行政機関における公の政治活動を目指すメンバーにとって政治的修練、政治教育の場となっていたことは間違いない。そしてクラブはその意思を請願書・建白書というかたちで示していたのだが、さらにはメンバーの中から、各行政機関の議員、判事、さらに聖職者を送り出すことで、より直接的に自らの意見を革命政治に反映させようとしたのである。その結果、共和2年、アミアン、ボルドー、ルーアンなどの大都市では、市議会構成員の半数以上をクラブのメンバーが占めたことが知られている。また地方行政を牛耳ることと平行して市民証明書の発行など治安維持にも関わるようになり、中には反革命容疑者逮捕などに乗りだすところもあった。こ

うしてクラブはジャコバン独裁の要石としての地位を確立していったのである。

さらにジャコバン独裁期、クラブは学校における教育内容の視察、教師志望者の審査や劇場における監視、演目の検閲など広義の公教育にも関与している。その中でも特に革命祭典の組織・運営を指揮したことは、彼らが中央から発信された新たな政治文化を地方へ移入する窓口になっていたことをうかがわせる。

以上のように地方クラブは実に多彩な活動を展開した。そしてこれに加入し革命政治に直接関与する市民はもちろん、一般席での傍聴や寄付行為のためにクラブを訪れる人々、また祭りや演劇、教育などに多少ともかかわる住民も、クラブという媒体を通じて革命政治に触れることになった。彼らは旧制度下とは違う政治参加を果たし、「政治」を「わがもの」として考えるような、政治哲学流の表現で言えば「政治を領有する」心性をもつようになる。政治的文化変容とでもいうべき、これらのプロセスの仲介者としてクラブは機能していたのである。

2 ジャコバン＝クラブのネットワーク

(1) ネットワークの拡大

次にクラブのネットワークについて紹介し、前述したクラブの活動がどれほど全国的に展開したのか考えよう。まずパリのクラブの「提携」数の推移からネットワークの拡大を整理する。1790年以降、地方クラブによる「提携」の申込みは急増してゆくのだが、パリが提携クラブのリストを公表した時、それはいっそう活発になっていった。しかし全国にはこうした提携クラブだけが存在したのではなく、パリのジャコバン＝クラブと直接連絡をとりあわずとも、ディストリクトのより大きなクラブと交信することでネットワークの一翼を担うクラブも多く存在した。そこでパリの本部と提携関係にあるクラブと、そうでない非提携クラブとに分けて結社数を示すことにする（以下、フランス全土の総クラブ数は〔 〕内に示す。）

90年8月15日までにパリのクラブと提携した地方クラブの数は91〔8月末に137〕であり、同年11月に135〔212〕、91年3月に226〔426〕、同年7月16日までに439〔900以上〕に達している。また91年12月の時点でクラブの総数は1250に及び、91年だけに限っても800の自治体に950以上のクラブができたことになる。これらを見れば、立憲議会期において、ネットワークは比較的安定した拡大を続けている。しかし立法議会期、国民公会初期には、多くのクラブの活動は停滞したようで、それゆえ92年末においてクラブの総数は1500と、その増加のペースは伸び悩んでいる。活動停滞の原因としては、戦争の激化と国民公会選挙の疲れ、農業の収穫期、そしてジロンド・モンターニュ両派の対立が考えられよう。93年冬になるといっそうネットワークは停滞し、パ

りのクラブと絶交する親ジロンド派のクラブも多くなる。この状況を打開させたのはイギリス・スペインの参戦、フランス軍の敗退、ヴァンデの反乱の勃発によってもたらされた危機感と、派遣議員の派遣であった。戦争への危機感が市民の革命への情熱を再び喚起する一方で、派遣議員は活動を停止していたクラブの蘇生、新しいクラブの設立に尽力したのである。93年10月、国民公会の調べによると、パリのクラブと提携しているクラブの数は798であり、非提携を含めた活動中のクラブの数は、1831まで回復していた。ではクラブの活動の絶頂期、94年春には一体どれほどのクラブが活動していたのか。提携クラブ数は800程度と思われる。一方、フランス全土で活動していたクラブの数については、1789年から共和3年の間に5510の自治体がクラブを有したことが明らかとなっている。クラブの対象を広げ、同一自治体内に存するセクション協会、友愛協会、女性のクラブ、若者のクラブ、軍人のクラブ、外国人のクラブなども含めると、クラブの数は6027になり、非常に広汎なネットワークが形成されていた可能性が理解されよう。一方で共和2年の爆発的増加も注目される。共和2年の秋から春（94年3月）という半年あまりの間に、実に3400ものクラブが新たに設立されたのである。

(2) 地方におけるクラブ設立の差異

これまでクラブのネットワークについてはその凝集性のイメージがことさら強調されてきたが、次に実際のクラブの設立状況を通じて、これを再考、修正してみよう。

まずクラブの設けられた自治体数が5510ということにかんして見ると、これは当時の全自治体の14%に過ぎず、ジャコバン独裁期にあっても、8割以上の自治体にとってクラブは馴染みのないシステムであったことになる。これを行政制度のヒエラルヒーでわけてみると、共和2年における88の県庁所在地にはすべて設立され、561あるディストリクトの主邑でも552の自治体で設立されている（98%）。しかしその下のカントンの主邑になると60%に落ちこむ（4814のうち2921）。これらを除く「単なる自治体」については7%しかクラブを持たないことになり、クラブのネットワークがフランス全土津々浦々に張り巡らされていたと考えるわけにはいかない。それゆえ「農村の政治化」は全国規模で進行したわけではないことが推察される。

県や地方ごとの差異も顕著である。クラブをもつ自治体の多い地域は3つに分けられる（南東部、南西部、北西部）。これに対して設立数が少ないのは東部と西部である。県別で最多なのはドローム県の275、最少はコルス県の5であり、実に55倍もの開きがある。次に共和2年においてクラブをもつ自治体の密度を県別に示した場合には、南東部が突出して高い。南西部、北西部はクラブの絶対数と比してやや低調であ

る。県別の数値を挙げるならば、最多はヴォークリューズ県の91%、最少はコルス県の1%となっている。このような地方ごとの差異は、独裁期においてもフランス人が一つのブロックを形成しえなかったことを示していよう。

以上にあげた地域ごとの濃淡の原因については、選挙の投票結果や地理的条件、国民衛兵の設置、経済構造、派遣議員の来訪などが考えられてきたが、そうした条件とクラブの数は必ずしも一致しない。例えば、かなりの的を射た指摘として都市化の問題がある。事実、人口4000人以上の都市にはクラブが確実に存在し、2000人以上でも90%超とほぼ存在している。ところが西部の調査では共和2年に2000人以上の人口をもつ都市が118存在するが、そのうち42の都市にしかクラブは存在しなかった。その一方で人口500人ほどの村に設立されるケースもある。またコルス県にはクラブがほとんど見られないが、これは都市化の未発達という問題に加え、コルス県特有の親族・家族的党派の存在がクラブの発達を阻害したという。都市化という指標だけでは、「クラブ現象」の説明は不十分なのである。さらにクラブの設立数・密度の分析にさいし留意する必要があるのは、設立時期の問題である。南西部のクラブは90年から91年にかけて多く設立されている。南東部は91年から92年にかけて爆発的にクラブが設立される。北西部においては5割以上のクラブが共和2年になって設立され、東部ノルマンディーにおいては実に87%のクラブがこの時期に設立されている。こういった設立時期の差異も、クラブの設立される要因が一つではないことを物語っていよう。

結局のところクラブの設立数やその密度は、市民の革命への期待感や政治意識を反映するもので、それ以上でもそれ以下でもなかろう。そしてネットワークの発展は、こうした意識の覚醒過程であり、クラブの数や密度の多寡は新しい政治文化の受容とその限界を示しているのだといえよう。こうしたクラブ・ネットワークは中央集権を狙う革命政府にとって両刃の剣であった。確かにネットワークの充実は、農村にまでクラブが設立され地方行政の確立・安定がもたらされるというメリットがあった。その一方で共和2年になってから新設された地方クラブについてパリの議員たちは不信感を拭えず、またその統制を地方における中継クラブに任せていた。それゆえこうした地方都市のクラブの政治的影響力が増してネットワークの凝集性を弱め、結果として中央集権を阻害するというデメリットをも抱えていたのである。

3 まとめ／展望

以上みてきたように、地方ジャコバン＝クラブはフランス革命に大きな推進力を与えた。事実、それはジャコバン独裁期には地方政治において要石の役割を果たした上、市民の政治的文化変容を促す仲介者でもあったのである。またそのネットワークにつ

いて見るならば、革命期には全国のクラブによって非常に濃密な情報交換の連絡網が組織されている。これほど大規模で水平的な市民の連携はフランス史上初めて現れたものであったが、独裁体制の神経網ないしは大動脈として機能したこのネットワークこそが、革命の全国的展開を可能ならしめたのである。その意味では市民の間に「世論」のうねりを作り出し、革命に参加する「国民」としての実感を持たせること、すなわち国民の創出をうながすことに寄与したともいえよう。

次にやや長期的にみた歴史的意義を展望として示しておこう。例えば共和3年(1795年)秋、憲法によって政治結社の相互連絡は禁止されるが、その後の総裁政府の寛容政策もあって、ネオ・ジャコバン系のクラブによって程なく蘇生する。共和6年には全国に700以上の政治結社が復活したことがわかっており、これは1791年の水準に匹敵する。このことに革命初期の政治経験が活かされた事は疑いを容れない。また政治文化について言えば、総裁政府期以降に行なわれた国民祭典において、クラブが移入したシンボルは表面上姿を見せなくなるが、それらは忘れ去られたわけではなかった。自由の木やラ・マルセイエーズ、マリアンヌは、19世紀に鮮やかな復活を遂げるだろう。

さらに残された課題として、フランス近代史全般のなかに革命期のアソシアシオンを位置づけることが必要だろう。同業組合の結成と労働者の団結を禁じた1791年のル＝シャプリエ法にも拘わらず、19世紀には多くのアソシアシオンが生まれている。こうした結社は必ずしも政治的目標を標榜するわけではなくとも、容易に政治化し革命や改革にコミットしてゆくことになるが、これらと革命期のクラブは政治文化のうえでどのような連続性を有しているだろうか。またアギュロンが言うように19世紀前半に農村において「政治化」が始まるならば、革命期に政治結社がおおく設立された一部の地方では、一足早い政治化が進行するのだろうか。このように19世紀の都市・農村における市民の政治意識を長期持続の観点から捉えることは、近代フランス史理解の一助となるだろう。

主要参考文献

- Agulhon, M., *Pénitents et Franc-Maçons de l'ancienne Provence* (2.éd.), Paris, 1984.
- Baker, K.M., *Inventing the French Revolution : Essay on French Political Culture in the Eighteen Century*, Cambridge, 1990.
- Bernet, J., "Aux sources de la sociabilité politique contemporaine : les clubs des jacobins sous la Révolution française (l'exemple champenois et picard 1789-1795)", *AHRF*, 266, 1986.

- Boutier, J., “Un autre Midi: Note sur les sociétés populaires en Corse(1790-1794)”, *AHRF*, 268, 1987.
- Boutry, P. et Boutier, J.(éd.), *Atlas de la Révolution française*, t.6, *Les sociétés politiques*, Paris, 1994.
- Brinton, C., *The Jacobins ; An Essay in New History*, Cambridge, 1930.
- Cardenal, L.de, *La Province pendant Révolution française, Histoire des clubs jacobins 1789-1795*, Paris, 1929.
- Duport, A.M., Dorigny, M., Guilhaumou, J., Wartelle, F., “Les congrès des Sociétés Populaires et la question du pouvoir exécutif révolutionnaire”, *AHRF*, 266, 1986.
- François, É. et Reichardt, R., “Les formes de sociabilité en France du milieu du XVIII siècle au milieu du XIX siècle”, *RHMC*, 34, 1987.
- Genty, M., “Association, affiliation ou fédération? Paris et la Province, 1789-1790”, in : Centre Méridional d’Histoire(éd.), *Les Fédéralisme Réalités et Représentations 1789-1874*, Aix-en-Provence, 1995.
- Kennedy, M., *The Jacobin Clubs in the French Revolution The First Years*, Princeton, 1982.
- Kennedy. M., *The Jacobin Clubs in the French Revolution The Middle Years*, Princeton, 1988.
- Kennedy. M., *The Jacobin Clubs in the French Revolution 1793-1795*, New York, 2000.
- Maintenant, G., *Les Jacobins*, Paris, 1984.
- Monnier, R., *L’Espace public démocratique. Essai sur l’opinion à Paris de la Révolution au Directoire*, Paris, 1994.
- Peyrard, C., *Les Jacobins de l’Ouest*, Paris, 1996.
- Pingué, D., *Les mouvements jacobins en Normandie orientale*, Paris, 2001.
- Saunier, E., *Révolution et sociabilité en Normandie au tournant des XVIII^e & XIX^e siècles 6000 francs-maçons de 1740 à 1830*, Rouen, 1998.
- Vovelle, M., *La découverte de la politique géopolitique de la révolution française*, Paris, 1993.
- Woloch, *Jacobin Legacy The Democratic Movement under the Directory*, Princeton, 1970.

小田中直樹「19世紀における農村民衆の「政治化」をめぐって」『土地制度史学』118号、1988年。

P.ゲニフェー、R.アレヴィ「クラブと民衆協会」『フランス革命事典1』みすず書房、1995年。

喜安朗『近代フランス民衆の〈個と共同性〉』平凡社、1994年。

谷川稔『十字架と三色旗』山川出版社、1997年。

福井憲彦編『アソシアシオンで読み解くフランス史』山川出版社、2006年。

槇原茂『近代フランス農村の変貌—アソシアシオンの社会史—』刀水書房、2002年。

森村敏己「「集う」ことの意味」森村・山根編『集いのかたち 歴史における人間関係』柏書房、2004年。

竹中幸史『フランス革命と結社—政治的ソシアビリテによる文化変容』昭和堂、2005年。